

## 会 議 録

会議名 (審議会等名)	令和4年度 第1回社会教育委員会議定例会		
事務局 (担当課)	生涯学習部生涯学習課 電話042-769-8286 (直通)		
開催日時	令和4年4月21日(木) 午前10時～正午		
開催場所	相模原市役所第2別館3階 第3委員会室		
出席者	委員	14人(別紙のとおり)	
	その他	0人(別紙のとおり)	
	事務局	8人(生涯学習部長、他7人)	
公開の可否	<input checked="" type="checkbox"/> 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/> 一部不可	傍聴者数	1人
公開不可・一部不可の場合は、その理由			
会議次第	1 あいさつ  2 議題 (1) 研究調査の柱について (2) 小委員会の役割について  3 報告 (1) 令和3年度第3回神奈川県社会教育委員連絡協議会理事会について (2) 令和3年度第4回全国社会教育委員連合総会について  4 その他		

## 議 事 の 要 旨

### 1 生涯学習部長あいさつ

生涯学習課長の進行により、開会のあいさつを行った後、生涯学習部長から新年度着任のあいさつを行った。

### 2 古矢議長あいさつ

古矢議長があいさつを行った。

### 3 議題

古矢議長の進行により議事が進められた。

#### (1) 研究調査の柱について

事務局より資料に基づき説明を行った後、グループワークを行った。主な意見は次のとおり。

(石川委員) A グループでは、1つ目の意見として、リスクリングをキーワードに、仕事で培ったスキルを地域でも使えるようにしていく導入として、自分が持っている能力を知ってもらえる仕組みをつくってはどうかと考えた。例えば、子どものおもちゃのお医者さんなどのように、自分の能力を発揮できるような仕組みづくり、地域人材のリソース化ということ公民館の活動として行ってはどうか。

2つ目は、PTA 活動の事例で、PTA 役員が公民館活動につなげた取り組みのように、成功した気持ちを上手く次の行動へと移していくような仕組みづくり、きっかけづくりをしてはどうか。

3つ目は、天岩戸作戦と題し、外出が難しく孤立しやすい子育て中の母親や高齢者などの社会との交流が難しい方が、楽しそう・面白そうと思える公民館活動に気軽に参加することで、そこから次のステップへと進める屋台方式のような参加の方法があってもいいのではないかと考える。

(若林委員) B グループでは、大きなテーマとして地域づくりを挙げた。地域をつくっていくには、これから地域を支えていく子どもが重要である。仕組みづくりに新たな方法等を取り入れるためには、現在の大人が子どもに教える活動だけではなく、子どもが主体となり活動していくことも必要ではないかと考える。例えば、スマートフォンの使い方について、子どもが先生となり大人に教えるというように、子どもに役割を与えることで当事者意識を持たせ、異年齢と交流することが地域を活性化させていくと考える。

さらに、学校に行けない子どもの中には絵が上手だったり、音楽の才能が豊かだったり、様々な才能を持っている子どもがたくさん隠れている。公民館はそのような子ども達の居場所の1つになれるのではないかと考える。

は行けなくても学校とは違う場所で自分の才能を伸ばせる場の仕組みを新たに取り入れることもできるのではないか。

また、3月に、ある小学校の50周年事業が行われた。その際、普段学校に來れない生徒に教員から声を掛け、教室で同級生と取り組むのではなく、PTA 実行委員の準備に参加してもらった。その生徒は翌日から学校に來るようになり、活動を通じて自分も役に立てる、役割があると気付くきっかけになったことを教員から聞き、私たちも大人も活動してよかったと思えた。このような、当事者意識や自分も役立つことがあると思えるような場の1つに公民館もなれるのではないか。現在の公民館活動・地域活動は大人から子どもにという形が多いが、これから子ども・若者からという形に変えていくことも、新しい地域コミュニティのつくり方ではないかと思う。

(秦野委員) C グループでは、2つの柱「子ども」に関する施策等はよく耳にする  
が、「若者」に関するものはあまり聞かないため、1つ目の柱に「若者」という言葉を入れた。

現代ではデジタルでの疑似体験が増えており、実体験できる機会が少ない。実行、失敗、実行、成功という過程を繰り返して成長するように、達成感を段階的に体験できる場をつくりたい。

「居がい」「行きがい」とは、その場に行く甲斐がある、自分が安全で安心できる、自分の力を発揮できる、生きがいにつながるという意味である。子ども期に子どもらしく育ちそびれた若者が、周囲の目や評価を気にせず、自分の可能性、能力を生かせる場をつくりたい。また、B グループでも意見が出ていたが、子どもの活動に大人が参加させてもらい、大人が子どもに教わる異年代交流の場もつくりたい。

もう1つの柱として、子どもの育ちを支え、つくり、理解する大人を増やしていかなければならず、この2つの柱はセットで取り組む必要がある。直接活動には参加できなくても、子ども・若者の多様性を理解する地域の大人を増やしたい。

現状、PTA 等の団体に所属していない人は公民館で部屋を借りた活動がしにくい状況であるが、そういう人たちがフラットに参加できる、大人のための自由な場を公民館の主催事業として行っていく発想が大事ではないか。

子どものために活動したいという思いを抱える大人は多くいる。また、大人自身も自己肯定感の低い人が増えているため、大人が多様なスキルを学び、挑戦し、生かすことができるような取り組みも必要である。

(議長) 3つのグループに共通していえることは、次の世代のことをよく考えて柱のテーマにしている。

A グループの意見にあった「リスクル」について、もう一度解説いただきたい。

(石川委員) リスキルとは、新たに地域に参入する際には、今持っているスキルをそのまま使える場合もあるが、新たなスキルが必要となる場合もある。メーカーで修理を行っていたが、地域では小さなおもちゃを直すなど、地域の方に教える際には、お客さんに対するのとは違った形でのコミュニケーションスタイルが必要など、もう一度自分の中をバージョンアップしていく、修正していくものとする。

(議長) B グループでも似た意見が出ている。学校だけでなく、他でも輝けるような場所をつくる。

(若林委員) 学校に行けなくても、違う場所に行けば様々な年代の子どもと共通の趣味などで輝いている子どももいる。ある子どもは、高校はフリースクールに入学し、その学校とは全く別の場所で、自分の得意分野や共通の趣味で違う学年の子どもと仲間になり、学校の友達が少ないが、他の場所では友達がたくさんいるという場合もある。私たちの教育は学校に行かなければいけないと言われてきたが、今は時代が変わり、学校だけではない輝ける場所を地域でたくさんつくってあげることで色々な才能を生かせるのではないか。

先程紹介した 50 周年事業では、事業を実施した翌日に、生徒がその様子を描いた素晴らしい絵を学校に届けてくれた。教員から、学校ではあまり目立たない子どもであると話があったが、そのような隠れた才能をもっと開花できる場所が多くあれば、これからの国・地域を支えていく子どもが育っていくのではないかと感じている。

(議長) C グループにも共通している意見があった。

(秦野委員) グループ討議の中で、異年齢の交流では、子どもの活動に大人が参画していくという意見もあった。B グループでも意見があったように、例えば学校に行けないが才能がある子どもに大人が教わる、子どもがつくる場に大人が参加するという意見が出た。天岩戸作戦も、楽しいことが自由にできる場もありつつ、本格的にはサークルで学ぶこともできるというところにもつながりそうであり、3 つのグループで上手くつなげて膨らませられそうだった。

(議長) 育ちを支えられる大人の学びとは、色々なことに興味をもって世界を広げていくという理解で良いか。

(秦野委員) 誰が子どもを支えるのかというときに、一定の場所だけでしか子どもが理解されない・遊べない・居心地よく過ごせないではなく、まちの中どこにいても理解してくれる大人を増やさなければならぬという意味も

ある。

また、活動できる人材も育成したい。大人自身も自己肯定感を持って多様なスキルを生かし、時事問題を深く学ぶなど、職業能力を身につけて再チャレンジできることなども含む。

(議長) 各グループの意見から感じたこととして、1 つは人づくり・人材育成が共通の関心事として挙がっている。特に子どもから青少年の若年層に、どのようにしてやりがいを持ってもらい自分の体験にしてもらうか、それが大人の務めであるという視点がよく浮かび上がっている。

もう1つは、それを促して学びを活動につなげていくこと、そこが上手く言葉として出てくるといい。

(小泉勇委員) まさしく学校教育もそうである、実際に学んだことが学校の中だけの学びではなく、生活や社会との関連性を持たせることが子どもの意欲につながる。実際に役立つ、活動につなげていくことは大事であると思う。

(議長) 自分の役に立つ、身に着くことはとても嬉しいことであり、それが成長の原動力になっていく。

(秦野委員) 学んで活動するということもあるが、活動していることを生かす学びが、リソース化、リスキルにつながっていくと思うが、今既に持っている学んだものを次に生かすにはどうしたらいいかということも必要である。例えば、手話を学んだから手話ボランティアになることもいいが、手話ボランティアとして活動していることを次の人に広げていくために、何をどうしたらいいのかという手掛かりを支えられるような学びなど、どのようなフレーズに整理していいかわからないが、それが仕組みづくりや当事者意識につながっていくと思う。

(安西委員) 地域には様々な人がいて、それぞれが得意分野をもっている。活躍できる場があればスキルを生かせるが、それぞれのスキルを上手く生かせるような形にできればいい。例えば、紙飛行機を飛ばすことが上手な人がいて、他の人もその飛ばし方を見て上手く飛ばせるようになるというように、隠れたスキル・人材を発掘する、そのような場づくり、環境づくりが大切だと思う。

(石川委員) そのような場は特別な能力を持った人を核にして、特別な能力を持っていなくても学んでやってみようという人が一緒に参加できるような仕組みづくりがあるといい。自分は特別な才能を持っていないと思ってしまうのではなく、みんなが参加できるように上手な人から習って、それを生かして子どもと一緒にやるというように、特別な能力を持っていない人でも、自分も黒子ならできるぞという意識ができたらいと思う。

(議長) 資料1-2の4ページに「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」とい

う言葉がある。これは文部科学省の生涯学習で掲げている言葉だが、これをカテゴリにして、その下に皆様の意見をつなげて当てはめていく、それを物差しによりスケールの細かな視点にしてはどうかと思うが、いかがか。

(秦野委員) 文部科学省の言葉をそのまま使用するということか。

(議長) 大きなカテゴリとしてはそうである。

(石川委員) それは全体像として使用し、更にキャッチコピー的なものがあれば一番いいと思う。一先ずつくっておき、より適切なもの、言葉があれば変えていくことも1つかと思う。協議を進めていく中で決まってくるのではないか。

(議長) 決して、ここで型にはめる訳ではなく、融通無碍に形を変えられるような発想で捉えて、一先ずどこに当てはまるかというように収めていく。

(秦野委員) カテゴリが大き過ぎる。どれに当てはまるかということよりも、皆様の思いがもう少し目に触れやすいようにした方がいいのではないか。国の焼き直しの中に当てはめない方がいい。

皆様の根底にある大きな流れは「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」であり、そこから具体的にどうしたいのかを意見出しすることが大前提である。結果として同じ答えになるかもしれないが、文部科学省の言葉に当てはめるのではなく、皆様から出た意見をどうまとめ返せるかというところから考えたい。

(若林委員) 本市独自の形をつくっていきるといい。

(小泉勇委員) 公民館に当てはまらないかもしれないが、公民館に来ることは「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」につながると思う。今出ているキーワードの中では、誰もが来れるような居場所づくりというキーワードが3つのカテゴリーに含まれるのであれば、そのままでいいと思う。まず公民館に来てもらうこと、どのように取り組むかということが視点としてあるといいのではないか。

(議長) 先程イメージーションという想像を使ったが、もう1つクリエイションという創造も極めてひねり出す苦しみがある。

(秦野委員) 30分のグループ討議では、発言のあった意見を中心に皆様議論されたと思うため、こういう点も柱として取り上げたいという意見があっても出し切れなかったものもあると思う。まず3つのグループに共通していることを一旦整理して、それを柱にしたときに、もっとこういう点も柱に入れた方がいいのではないかという意見も出てくるのではないかと思う。次回定例会に向けた宿題として、これらを整理し、どうすれば全体としての柱の言葉になるか、全委員でアイディアを出し合うというのはいかがか。

(議長) 宿題の要点は、1つは共通するものを引っ張り出す、もう1つは、こういう風に付け足すとより引き締まるというものか。

(秦野委員) その通りである。

(議長) では、3つのグループに共通すること、及びグループ討議で意見を出せなかったが付け足すと柱がより豊かで引き締まる意見を互いに出し合い、次回定例会で整理するということよろしいか。

(全委員) 承認する。

## (2) 小委員会の役割について

事務局より資料に基づき説明を行った。

(秦野委員) 資料2-4について、新たに意見することはできないか。

(事務局) 前回定例会で皆様にご了承いただいたとおり、時間的猶予がないため事務局の方で質問項目等の事務を進めさせていただく。

しかし、市・公民館ホームページ等を活用したアンケート調査については、時間的猶予もあるため、実施方法や設問事項を皆様に一から協議いただき進めていきたいと考えている。

第1回小委員会では、柱の検討ではなく、今後進めていくアンケート・ヒアリング調査等の詳細を議論いただくことを想定しているため、グループワークの結果は議事録と併せて皆様に共有した上で、次回定例会に向けて、皆様に事前の意見出しをお願いしたいと考えている。

(議長) グループワークで出た意見を、第1回小委員会で少し深掘してもいいのではないか。

(秦野委員) 小委員会で中途半端に詰めることにより、本日出た意見とかけ離れてしまう可能性もある。それでは本日協議した意義がなくなってしまう。また、アンケート・ヒアリングだけでも議題内容が重いため、柱についての協議を加えてしまうと協議の時間が足りなくなる。

本日の柱に関する意見について全く触れずに協議するというのではなく、本日の意見も念頭におきながら、それらの意見をどのようにアンケート・ヒアリングにつなげていくか検討し、次回定例会で柱の検討をする際に話ができるといいと考えるが、いかがか。

(議長) 第1回小委員会では、本日の意見を藪にらみのように横に眺めながら、アンケート・ヒアリング調査について議論を進めていくということよろしいか。

(全委員) 承認する。

#### 4 その他

事務局より、次回定例会スケジュールを説明した。

古矢議長のあいさつにより、会議を終了した。

以 上

令和4年度 第1回社会教育委員会議定例会出欠席名簿

	氏 名	所 属 等	備 考	出欠席
1	小泉 勇	相模原市立小学校長会		出席
2	金子 友枝	相模原市文化協会		出席
3	小泉 喜亮	相模原市P T A連絡協議会		出席
4	大谷 政道	相模原市公民館連絡協議会	副議長	出席
5	安西 信行	相模原市青少年関係団体連絡会		出席
6	大橋 千景	虹のおはなし会		出席
7	若林 由美	一般社団法人星と虹色なこどもたち		出席
8	石川 利江	学識経験者（桜美林大学教授）		出席
9	秦野 玲子	学識経験者（RE Learning代表）		出席
10	古矢 鉄矢	学識経験者（学校法人北里研究所参与）	議長	出席
11	小林 政美	学識経験者（特定非営利活動法人男女共同参画 さがみはら 副代表理事）		出席
12	海野 浩	公募		出席
13	水谷 英正	公募		出席
14	雨宮 健一郎	特定非営利活動法人文化学習協同ネットワーク		出席